

宮古圏域の「著書・論考」をたずねて 第一部 歴史と民俗

はじめに

一九四〇年代半ば宮古の人口は、敗戦で台湾や朝鮮などの旧植民地はじめ、県外軍需工場や疎開先からの引き揚げ者、復員軍人・軍属等で八万近くまで増加していた。その後次第に減少に転じ現在六万弱、県総人口の五%でいどに落ちついている。面積は全県のほぼ十分の一だが、明治以来教育熱心な地域として知られ(「沖縄県史」第四巻、一九六六)、表現活動も地理的・歴史的背景によるものであろうか、きわめて活発だといえよう。

先の世界大戦で平良の市街地はもとより集落の大方は、連日の米・英軍の無差別爆撃で焦土と化し、生産活動は一定の停止を余儀なくされていた。そのため折角帰郷したものの再び職を求め、食を求めて沖縄本島や八重山へ移る人たちもいたが、大方は焼跡にいつまでも拱手傍観せず、生産活動・表現活動を再開させている。

敗戦直後は極端な「モノ」不足で、ウラ・オモテ二頁だけの小新聞や雑誌(?)ではあったが、衣・食・住はじめすべてに事欠いていたはずの人びとが、配達を待ちきれず印刷所まで取りに来たと伝えられている。人びとは活字や情報にも飢えていたのであろう。

新聞は、一九四五(昭和二〇)年十二月一日、新城松雄、山内朝保、平良好児らの「みやこ新報」に始まって、一九七二年五月「祖国復帰」前後ごろまでには二〇種近い興亡が記録されている。現在の地元二紙――「宮古毎日新聞」(一九五五・九 創刊)と、「宮古新報」(一九六八・八 改題)に落ち着く間にも数紙確認できるが、それだけ表現活動が

活発であったということであろう。

雑誌は、きわめて困難ななかで紙やインクを入手し、一九四六年三月五日平良好児(定英)の「文化創造」、同年十二月一日の本村武史(玄典)、平本魯秋(実一)、平良恵仁(小南敬介・楽浪)らによる文芸協会の「文芸旬刊」を中心に、短歌会、俳句会、詩のグループ等が誕生し、活発な表現活動を始めている。

単独ではその後多くの著書・論考を持つ稲村賢敷が一九四七年十一月発足した宮古文化史編さん委員会を引きつぐかのように、一九四九年九月「郷土研究」を創刊して宮古研究発表の場を設け、一九五四年五月には「宮古島旧記 上巻」を著わしている。亀川恵信は一九五三年「宮古医学会誌」第一巻、同年孝子夫人との共著で「随想録」、一九五四年「宮古先覚者の面影」等を出している。

文芸面では一九四七年七月、本村武史編「詩集 白南風」第一集が嚆矢とされよう。単独では翌一九四八年八月、克山滋(大見謝恒全)の「詩集 白い手袋」が出ている。一九六〇年代に入って、復帰協宮古支部を中心に壮大な「祖国復帰」(沖縄返還)運動が高揚した時期には、米軍布令で出版活動は制限されているなかで大小さまざまなサークルが生まれ、活発な表現活動が展開されている。

一九七三年十月、平良好児が文学の「種まく人」を自任して季刊誌「郷土文学」を創刊(九〇号、一九九六・二)し、文芸各面はもとより表現活動全般に開放したこともあって、従来の書き手のみならず多くの若手も登場して、宮古はさながら「百華齊放」の観を呈している

仲宗根 將二

といつても過言ではなさそうである。

本稿は一九九〇年代以降も数多く出ている宮古圏域に関わる著書・論考のなかで宮古郷土史研究会の「会報」や職務上の必要性から、あるいは関係者の要請で地元紙誌等に執筆した論考のなかから、可能な限り宮古全般が概観できるよう選びだしたものである。大まかに、1 「歴史と民俗」、2 「文芸と芸能」、3 「組織の動向」、4 「人：」の四つに分類して、改めて公表するものである。多少とも宮古を知る導入にもなれば幸いである。

一部	歴史と民俗	19項
二部	文芸と芸能	11項
三部	組織の動向	15項
四部	人：16項	

おわりに

## 第一部 歴史と民俗

### 1. 慶世村 恒任「新版 宮古史伝」

本書の初版は一九二七年、南島史跡保存会(宮古)から出ている。宮古史を初めて通史として体系化した古典的な入門書である。著者は初版刊行二年後の一九二九年、三十七歳で病没しているが、没後四回復刻され、今回は三十余年ぶりの復刻である。

旧字体や旧仮名遣いなどを常用漢字や現代仮名遣いなどに改めるなど、宮古史に疎い読者にも親しみやすく配慮されている。それゆえ「新版」としたのであろう。

著者の慶世村恒任は、一八九一年、宮古・平良の生まれである。祖先は首里・英姓の子孫で、王国時代は頭クラスを輩出させた旧家では

あるが、置県後のいわゆる没落士族である。郷校をへて首里の師範学校に進み、在学中は東西の文学書に親しみ、まれに見る読書家として知られたが、病気で中退している。

その後、二度熊本で兵役に従事した後は、数年にわたって北九州各地で講談や童話などを語り歩いたと伝えられている。帰郷後は小学校の代用教員や新聞記者の傍ら、宮古旧記類はじめ家譜などを渉猟し、古老から神話・伝承や祭祀、古謡など、全般にわたって聞き取りした成果が本書に凝縮されている。

天太の代以前、争乱時代、豊見親の代、大親の代、の以上四編三十七章構成に、付編(明治大正概説)、付録(古謡)からなる宮古通史である。時期区分については異論もあるが、ほぼ原始、古琉球、近世琉球、近代に位置づけられる。全編を通して著者の宮古に寄せる熱い思いがうかがえる、郷土愛の結晶ともいえよう。

初版刊行以来、研究の進んだ今日でも「信頼すべき宮古辞典」(比嘉春潮)、「最もすぐれているのは、祭事、宗教、社寺及び土俗風習」「古謡集である(島尻勝太郎)」と評価される宮古歴史研究の入門書としての役割を果たしている。

この「新版」には著者の『宮古民謡集』第一輯も収録されている。「読者購入上の便宜を図る」配慮で、四分冊中の一集として刊行されたようだが、二―四集の出ぬうちの病没が惜しまれる。

とはいえ、民謡集は初版以来八十余年ぶりの復刻であり、研究者にとつても得難い史料となる。〔琉球新報〕二〇〇九・一・二五

### 2. 稲村賢敷『宮古島庶民史』

敗戦直後のドサクサのなか、南九州の疎開先へ小さな漁船で密航までしてきた父とも頼む叔父ではあったが、時節柄定職はなかった。浜

辺の塩炊き場で塩を買って農村へ出向いて米にかえ、さらにその米を市街地へ運び闇市で金にかえた。こうしたささやかな利ざやで雑穀やサツマイモを買って一家六人かろうじて糊口をしのいでいた。

そんな暮らしであったが、世の中はいつか落ちつくときがくる、その日のためにとにかく学校はつづけよ、という叔父が、ふっと思い出したように口にするのに、伊波普猷と山之口猷の名があった。沖縄県を代表する学者であり、詩人だということではあったが、叔父もそれほどくわしく知っているようではなかった。

高校に入って公共図書館を利用するのを知ったころ、世は朝鮮戦争の真最中であつた。単独講和か全面講和か、の激しい論議が落ちついたころには、メーデー事件、ビキニ水爆被災、MSA協定など、キナ臭く騒然たる世相であつた。

そのころ初めて伊波普猷の『古琉球』、ついで『山之口猷詩集』を手にした。通俗だが、まさに脳天を鉄槌でうたれたような思いであつた。疎開先に沖縄県出身者は他に誰一人いない。沖縄方言はおろか、宮古方言の片言さえ聞くこともなく、すっかり忘れて過ごしてきた十年近い歳月を、今さらのように振り返ることになる。

一度沖縄へ帰ろう、宮古へ帰ってこよう、と考えるまでにさほど時間を必要としなかった。三カ月のつもりが体調をくずし、さらには様々なしがらみにぶつかり、ずるずると滞在を長引かしているうちに今日になってしまった、といえようか。「身分証明証」を「南連」に送り返して一年、二年と過ぎていく。その間、暇さえあれば沖縄史をあさっていた。しかし率直に言つて、読後感はいえれば皇国史観といわぬまでも、王統中心の思いが強かった。首里・那覇を中心にした歴史展開であり、宮古・八重山をはじめ国頭などの地域はみえず、国の基たる農民不在の歴史だと思つたものである。

こうした釈然とせぬ思いのなかで出会つたのが、稲村賢敷の『宮古島庶民史』であつた。一九五七年夏ころであつたらうか。歴史展開の舞台が宮古に限定されていることへの新鮮さとともに、大陸をはじめ各地域とかかわっていることを示しつつも、日本本土はおろか沖縄本島とも異なつた歴史と文化をもつ時代、いわば宮古独自の世界への開眼でもあつた。

琉球王朝成立以前、宮古が自立し、いわば力量相応に中国大陸をはじめ周辺諸地域と交渉をもち、王朝成立後も主体性をもつてかかわっていたであろうことを知つたのは、新鮮な驚きであつた。一四〇一六世紀初頭にかけてのおよそ二世紀の間、宮古は自らの統率者を<sup>トウユミヤ</sup>「豊見親」(響動む親<sup>トウユミヤ</sup>名高い指導者)と尊称した、そういう時代である。のちに、この時期の評価をめぐって著者と下地馨先生との間で「倭寇論争」が展開されたのは周知のとおりである。

当然のことながら琉球弧の島々は共通の部分をもちつつも、それぞれ地域性ゆたかな歴史と文化を展開していた。いわんや南北三〇〇〇余キロメートルにおよぶ日本列島の大小の島々が、均一で同質の歴史や文化を展開してきたかのように思い込んできた日本史像を根底から考え直させるきっかけになつたといつても過言ではない。

当時著者の稲村先生は六十二歳、琉球政府立宮古図書館長の職にあつた。平良区立北小学校の正門を入れて直ぐ左手に、米軍払い下げの俗にカマボコ兵舎とよばれた小さなコンセットを転用しての図書館で、職員は館長のほかは一人だけであつた。

稲村館長は調査に出歩かれるの不在がちであつた。しかし在勤中はいつも机に向かつて書きものしておられた。開放された入り口からは校庭ではしゃぐ子ども達のざわめきが飛び込んでくるが、まるで意に介さぬ様子であつた。それから四年後、図書館長を辞して那覇へ

転居され、その間、直接ことばをかわす機会を得なかった。さらに十余年後、那覇市史編集室の嘱託として小禄支所二階の一隅で、ひとり「家譜等」の解説、執筆をしておられるとき、お目にかかり、ようやく積年の思いを申し上げることができた。先生はなお若者のような情熱をこめて、宮古の個性ゆたかな歴史について語り、年若い宮古のために働けないことをくり返し申し訳ないと言っておられた。

いまや考古学をはじめ諸学問の成果は、宮古・八重山の先史時代が縄文・弥生の文化を経験していないことを明らかにしている。同時に日本列島そのものが海をへだてた大陸と様々なたちで対応してきたことも知られるようになった。太平洋側と同様で、潮流と季節風を抜きにしては何も語れない。もはや宮古列島の歴史や文化を画一的にみるのが如何に当を得ないものであるかを教えている。それぞれの地域は相互に関係し合いながら、その地域の拠って立つ歴史や文化を背景に、個性ゆたかにその地域を主張している。

とりわけ沖縄県はその地理的条件から各地の文化が交流し、醸成されてきたことを教えている。我が宮古もその重要な一端を担っているのである。今年には伊波普猷の名を教えてくれた叔父の十三回忌、さらに二年後には宮古Ⅱ沖繩の歴史をアジア的広がりの中で考える端緒を開いてくれた稲村先生の生誕百年を迎える。

（「新沖繩文学」92号、一九九二・三・三〇）

### 3. 与並岳生「新釈 宮古島旧記」

一九四〇（昭和十五年）年生の与並岳生は、宮古は城辺・西里添の出身で、「琉球新報」在職中から著述を始め今や三十指を越す著書・論考を持つ現役の作家である。「新 琉球王統史」など、琉球史に材をとった作品が多いが、そのなかのひとつに「宮古島記事仕次」などをなぞっ

た「新釈 宮古島旧記」がある。宮古の歴史を若い世代はもとより、他地域の人にも「分かりやすく」「親しみ」やすいように、「私積も織り込ん」でまとめたという（「あとがき」）。

#### 1. 「和文」に長ける

宮古旧記類は周知のように、十八世紀初〜中期にまとめられており、「御嶽由来記」「雍正旧記」「宮古島記事」「宮古島記事仕次」「宮古島在番記」の五点が知られている。前期三点は首里王府の正史編さんのための求めに応じて調査し報告した「古事」等の控え。「在番記」は蔵元詰め役人が整理した「沿革誌」風の記録で、一八七九（明治十二）年の廃藩置県後の一八九六年の蔵元閉鎖まで書きつがれている。

「記事仕次」はそれまで八重山とともに独自の歩みをしてきたであろう宮古を琉球国に統合させたとみなされる仲宗根豊見親の系統・忠導氏の友利首里大屋子「ウヤキ屋」の大王がまとめた「物語」を首里王府派遣の在番筆者・明有文長良らが「校訂」した記録である。

古意角・姑依玉の男女二神が天降りして宮古の島々を生み、人の世が始まるようになって、歴史上広く知られた人物群―野崎長井の里の真牛、嘉播の親、糸数大按司、飛鳥爺、佐多大人、目黒盛、与那覇勢頭、大立大殿、仲宗根豊見親…らの群雄が割拠して闘争を展開していく様が、中世軍記物風にまとめられている。

日常的にはそれぞれの地域の方言でくらししていたであろう当時の役人層が、「和文」にも長けていたことを示している。

#### 2. 「記事仕次」等をなぞる

昭和に入って宮古の歴史を初めて体系化した慶世村恒任の「宮古史伝」（一九二七年）や稲村賢敷の「宮古島庶民史」（一九五七年）も古琉球から近世琉球にかけては「記事仕次」はじめ、五点の旧記類が広く反映している。

「新釈 宮古島旧記」はそれらにくわえて、忠導氏や白川氏等の「家譜」、琉球正史の「中山世鑑」や「琉球国由来記」「球陽」、さらには伊波普猷の「古琉球」などの記述も活用して、時期不明の年月や人物の生・卒年、不鮮明な事柄などに独自の解釈を示して展開している。「新釈」とした所以であろう。

「記事仕次」は、「島始神託」に始まって、「仲屋真保那瑠宮女になりし始末の事」まで二六条からできている。冒頭の「島始」は本書では「島建ての事」と平易な表現に改め、以下各条ともに「一の事」を付して同様によりみ替えられている。

長井の里の真牛、西銘嘉播の親、真牛を娶る、三兄弟不孝、保里天太と二子及び孝婦、飛鳥主(翁)、西銘按司の婿となる、飛鳥翁とウキミヅリ決闘、飛鳥翁の最後と下女サラモイ、糸数大按司、従弟飛鳥翁の仇を討つ、ウキミヅリの最後とコーチメガ、目黒盛登場、目黒盛武勇、「七兄弟」と宮真古兄妹、目黒盛、七兄弟と戦い滅ぼす、目黒盛、白川志瑠殿の婿になる、糸数大按司、妖術で最期を遂げる、与那覇原軍の跳梁、大嶽城・大浦多志城・狩俣攻め、高腰按司の滅ぼさる、目黒盛、与那覇原軍との死闘、与那覇勢頭豊見親のニーリ、与那覇勢頭、中山入貢、宮古の八重山支配、目黒盛一統と与那覇勢頭の融和、仲宗根空広登場、仲宗根豊見親、宮古島主長となる、このあと28条「アカハチの乱」や34条「与那国鬼虎討伐」38条「宝剣治金丸献上」等とつづき、41条「哀れマボナリが事」で本文は閉じている。

### 3. 連続しての侵攻

宮古の群雄割拠のころ、「兵乱の広がる宮古を憂えて」「統一への義兵を挙げた」与那覇原軍の「首領佐多大人」は「渡来人」あるいは「倭寇の荒々しさを想像させ」る、目黒盛勢を漲水浜まで追いつめたが、猛犬等の出現で逆転し、下地の与那覇と城辺の与那浜に逃れた。

のちに白川浜から船出し、中山(琉球)に朝貢した与那覇勢頭は「佐多大人の息子であろう」と記している。仲宗根豊見親の、オヤケアカハチや鬼虎討伐は「弘治年間(…一五〇〇〜一五〇五)の「連続的な侵攻」とみなし、治金丸と真珠の尚真王への献上は勝利の「慶賀」としてではなく、「仲宗根一族の将来の安泰」をはかる「忠誠の志」を示すための尚真王への献上とみなしている。全巻を通して講談をよむような歯切れのよい文体である。

### 4. ユナンダキ生まれ

先の世界大戦中、国民学校初等科(現小学校)四年生のとき、南九州のとある街に疎開した。そこでは刀の目利きもする竹刀職人の義理の叔父が、毎夜のように寝物語に講談を話してくれた。

荒木又右衛門や堀部安兵衛の仇討ち、曲垣平九郎の馬による石段の上下早駆け、後藤又兵衛や塙団右衛門の武勇、尼子十勇士や真田十勇士の活躍、それに盲目の国学者・塙保己一など、記憶はなぜか今も鮮明である。本書を手にながら、往事の叔父の声色まで回想していた。著者の本名は岡田輝雄。確認したわけではないが、筆名の「与並岳生」は、文字どおり出生地「与並岳ユナンダキ」をそのまま漢字に当てはめたのではなからうか。ふるさとへの熱き思いも伝わってくるようである。(「宮古郷土史研究会会報」二四五号、二〇二一・七・一二)

### 4. 下地和宏「宮古の御嶽と鳥居」

#### はじめに

下地和宏氏の「宮古の御嶽と鳥居―その背景について考える」をよんだ。宮古の御嶽と鳥居(≡神社)について、これほど徹底したフィールドワークと文献を渉猟した論は他に類がないのではないか。御嶽の地域的な広がり、その件数、「注」に示された「参考文献」の多彩さ、

宮古の御嶽と神社研究の最高の水準を示しているようだ。

### 1. 神が鎮座する所

同論考は、本年一月に発行された神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料センターの「非文字資料研究」19号に収録された、A四判三〇頁に及ぶ労作である。冒頭に「要旨」が示されている。およそ次のとおりである。

八〇〇余ある宮古の御嶽は、その多くは神社風に変化しつつあるが、「神が鎮座すると考えられる、厳かなる場所に変わりはない」と明快に示した上で、沖縄の近代化は、一八七九(明治十二)年の「琉球併合」後、「忠君愛国」教育とともに歩んできた。『教育勅語』の暗唱、『御真影』への最敬礼、宮城遙拝、天皇陛下万歳三唱などを強制されてきた、『皇民化教育』の洗礼を受けた人々が、日本への『同化』に向けて、「御嶽の『神格化』をはかった、『鳥居、灯籠を建立、籠り座を拝殿に、イビを神殿に改築し、神社風に変えた』」、「鳥居建立の風潮は、戦後もひきずり、「違和感なく建立」されている、との認識である。

「はじめに」で「宮古旧記類」には御嶽は40記録されているとし、神社とは無縁の御嶽に「国家神道」が浸透して、一九一八(大正七)年、宮古最高の聖地・漲水御嶽が神社風に改められた、さらに一九二五年には与那覇勢頭・仲宗根両豊見親を祭神とする宮古神社が「郷社」として創建され、一九四〇(昭和十五年)「皇紀二六〇〇年記念」で、権現堂との合祀へと進む。「旧記」記載の御嶽と鳥居建立の「一覽表」では、戦前期に神社風に改装、あるいは鳥居が建立されたのは25、鳥居はないが改装、「記念碑」が建立されているのが4。

「教育勅語」「戌申詔書」「天長節」「紀元節」などによる「日本化」「同化」教育が、「御嶽の鳥居建立と不可分の関係にある」と、次の

ように展開している。

### 2. 「鳥居」建立へ

- 一. 「宮古島旧記」の御嶽と鳥居 (1) 地域と鳥居
- 二. 皇民化教育 (1) 「忠君愛国」と小学校設立、(2) 「教育勅語」、(3) 「御真影」拝戴、(4) 三大節(のち四大節)
- 三. 鳥居の建設 (1) 漲水神社(平良字西里)、(2) 大主神社(池間島)、(3) ウプ(大)御嶽(下地字嘉手苅)、(4) 赤名宮(下地字上地)、(5) 下地神社(下地字洲鎌)、(6) 大主神社(平良字西原)、(7) 阿津真間御嶽(平良字西里)、(8) 砂川神社(城辺字砂川)、(9) 飛鳥御嶽(平良字東仲宗根添)、(10) 水納神社(多良間字水納)、(11) 嶺間神社(多良間字仲筋)、(12) 長浜御嶽(伊良部字長浜)、(13) 久知名大按司御嶽(平良字松原)

### 四. 御嶽の整理統合

### 五. 戦後の鳥居

おわりに

琉球王国時代、王府公認の御嶽は十六。その筆頭は宮古創世神をまつる漲水御嶽で、目黒盛豊見親が整備して「其の由来をただし」て、「祭事など盛大に執行」してきた、石垣は仲宗根豊見親がオヤケ赤蜂を討ち、凱旋記念に「奉納寄進」しており、「老若男女貧富を問わず宮古島鳥建ての氏神として尊崇してきている」として、立津春方が一九一八年、一九三二(昭和七)年の二度広く寄付を募り、鳥居、拝殿、神殿などを神社風に改装し、「漲水神社と呼び替えた」と、当時の新聞報道なども引用して紹介している。

### 3. 神社の建立

御嶽信仰を国家神道に組み入れるため、沖縄県は一九四三(昭和十

八)年一月、「沖縄県神社創立計画書」を神祇院に提出している。「各字の御嶽を一か所に合祀して、村に一つの村社を建てる」など四項を骨子にしていたが、翌四四年には挫折している。それでも山北、七原、来間の三集落は合祀したようだ。

御嶽に関係のない純然たる神社は二つある。先にふれた宮古神社、それに一九〇二(明治三五)年一月創建の多良間神社である。宮崎県出身の進藤栄校長が村民を説得して、御嶽の福木で校舎を新築し、それを記念しての土原豊見親を祭神とする神社の建立である。

一九二五年創建の宮古神社は、熊野(波之上)権現の三神を合祀して「県社」に昇格し、一九四四年六月遷座祭を催している。平一、平二(現北)両校の三年生以上の児童も参列している。漲水町内会(現自治会)は七福神の乗った「宝船」、北西里町内会は銀色に輝くトウンビヤン(龍舌蘭)の縫いぐるみの獅子舞いを披露していた。

#### おわりに

一八九〇(明治二三)年、「教育勅語」等で全国的に始まる「皇民教育」は、天皇を唯一主権者とする「大日本帝国憲法」にもとづいており、「御真影」配付、九一年「祝日大祭日儀式規定」、儀式でうたう歌は「尊王愛国ノ志気ヲ振起スルニ足ルベキモノ」で、数世紀にわたって他府県と異なる歴史をもつ沖縄県ではそれが一層極端に展開されたといえよう。

(「宮古郷土史研究会会報」二三八号、二〇二〇・五・十一)

#### 5. 来間泰男『稲作の起源・伝来と『海上の道』』

沖縄国際大学で四十年近く「日本経済史」や「沖縄経済史」等を研究し、講じてきた来間泰男教授が、このほど「沖縄史を読み解く」シリーズ第一弾として、『稲作の起源・伝来と『海上の道』』を上梓さ

れた。四六判の上・下二巻合わせて六〇〇余頁の大著である。

「私の学習の成果を提示するもの」で、「研究の成果を提示するものではない」、それゆえ「必ずしも独創的な論を展開するのではない」「(はじめに)」とのことではあるが、学習した著書・論考は表示されているだけでも一三〇余点。それらを各章の表題にそって、各論者の初期発表から最新の研究成果まで、こまかく跡づけて整理、紹介し、一定のコメント、結論へとみちびく。「歴史学を勉強した者ではない」と、ことわってはいえるものの、その読みの広さ、深さには説得力がある。それはとくに「現代の若者に理解してほしい」との思いで、これまで以上に「分かりやすく書くことを心掛け」ということにも起因しよう。

上・下巻は次の六章構成になっている。「日本人と沖縄人の起源」38、「日本と沖縄の縄文時代」13、「稲作の起源と伝播」照葉樹林文化論とその批判」25(以上上巻)、「縄文農耕と水田稲作」32、「弥生」平安併行時代の沖縄」13、「稲作は沖縄を通過して日本に伝わったか」新旧の『海上の道』をめぐる」18(以上下巻)である(各章下の数字は著者の引用した著書・論考の数、合計一三九点)。

一九五二(昭和二十七)年、柳田國男が『海上の道』で展開した、大陸南部から海流と季節風によって宮古島に渡来したであろう人びとが、のちにイネの適地を求めて島伝いに北上し、日本人の祖となった…、「弥生文化」の始まりを意味していよう。このロマンにみちた日本人渡来の壮大な仮説は、発表直後から考古学や人類学等の各分野からは否定的な見解が示されてきた。しかしこの仮説の提起を契機に、イネの渡来、ひいては万人が関心を持つていようであろう日本人の起源について、様々な見解が提起され、現在まで議論が深められているのは周知のとおりである。

著者は、現段階での稲作の起源と伝播について、各論者の説を整理した上で、池橋宏説に依拠しつつ、およそ次のように理解しているようだ。

稲作は、紀元前六〇〇〇年ころに長江中流域で、また紀元前五〇〇〇年ころに長江下流域でも始まった。その担い手は根栽農耕と魚類に依存した水辺の民族で、当初から田植え方式(水田)であった、この稲作が中国の北へ、東へ、朝鮮へ、日本へと伝播して、形質はジャポニカへと定着していった。「種子と農具と農耕方式が一体となって伝わり、」かなり急速に日本各地に広がっていき、社会の構造変化をももたらした」<sup>1)</sup>日本には「山東半島―遼東半島―朝鮮半島をへて北九州に伝わり」、日本の歴史を大きく転換した「弥生時代の始まりである。ここで柳田のイネの「南島コース」は否定される。

紀元前二〇〇〇年ころに中国から西へ、雲南をへてインド東部に伝わったイネは、新たに野生種と交雑し、雑穀栽培の方式に取り入れられて、一年生のイネに変化し、形質はインディカとして定着していった。南へは、同じく紀元前二〇〇〇年ころ、インドシナ半島あたりまで伝わったのが、気候と栽培方法の違いから、本来の温帯型ジャポニカが熱帯型ジャポニカ(「ジャバニカ」という形質変化を遂げた。

沖縄で農耕が始まるのは「グスク時代」<sup>2)</sup>十〜十二世紀から十四〜五世紀で、それも「あくまで採集・狩猟・漁労が中心であって、その一部にわずかに農耕も組み入れていた」、<sup>3)</sup>少なくとも十六世紀まで『農耕中心の社会』にもならなかったとの認識である。さらに文化は、当初はもっぱら「日本本土から伝来したが、その後は南からもさまざまな文化が伝来し」、それは今も続いている、こうして形成された「沖縄型農耕」はかなり独自性があり、「日本型農耕」とは異なっていた「熱帯島嶼的農耕と共通性の強いものとなって展開してきた」とし

ている。

このような認識に立つて、「沖縄文化の理解」に当たっては、「日本文化との共通性と異質性を踏まえること」を「基礎におかなければ、真の『沖縄―日本』の連帯感は生まれていかないだろう」と指摘している。

著者はこのあと、第二巻「按司の発生とグスクの建造」、第三巻「琉球王国の成立」、第四巻「薩摩藩支配下の琉球王国」、第五巻「琉球処分前後」とつづける構想をもっている。最終的には「沖縄史をそこに孤立した歴史としてではなく、日本・朝鮮・中国・東南アジア諸国との関係性の中で捉え」て、「体系的な沖縄史(通史)を築きたい」(「なぜ『沖縄史を読み解く』のか」<sup>4)</sup>『評論』一七八号)との遠大な構想にもとづくものである。執筆にさいして「重点的に光をあてるのは、生産活動の具体的な姿だ」(『琉球新報』五・二三)と強調しており、立脚点はきわめて明快である。

著者の来間泰男氏は四十年近く在職した沖縄国際大学をこの三月定年退職された由、「沖縄史を読み解くシリーズ」は、「その後の人生の目標」として設定されているようだ。ご自重、ご自愛の上、完結の早からんことを期待したい。

(「宮古郷土史研究会会報」一七九号、二〇一〇・七・三)

## 6. 来間泰男〈琉球国〉と〈南島〉と古代の日本史と沖縄史

### 1. 日本―九州―沖縄と読み解く

著者はさきに「沖縄史を読み解く」シリーズ第一弾として、『稲作の起源・伝来と『海上の道』』上・下巻二冊で六〇〇余頁の大著を上梓されたが、本書はそれにつづくシリーズ第二弾、三冊めである。沖縄の「原始時代」を取り上げた前著を受けて、副題「古代の日本史



と沖繩史」が示すように、平安時代前半、ほぼ十世紀までを両者対応させながら読み解いている。沖繩史では、「グスク時代」に入る直前までということになる。

前著同様ほぼこの十年にわたる最新の研究成果を読み解いた上で、著者の考えが提示されている。著者の時代区分は、「沖繩史は日本史とは別の国の歴史」と捉える向きもあるが、沖繩史は「琉球王国の成立までは、どうみても日本史との関係で動いて」おり、「かつて伊波普猷が論じたように『日本文化の南漸』の時代で」、「日本史を相対化する時代は、この琉球王国の成立直前になってから」だとの認識に立っている。但し、日本史の時代区分に併行して、それが何世紀であるかを表示することで、沖繩史に対応できるよう配慮されている(はじめに)。

## 2. 引用文献は延べ二一〇点

読み解いた著書・論考は、巻末に各章別に表示されているが、延べ二一〇点にのぼっている。これらの一つひとつを検証しながら、著者の考えが示されている。

全体九章二十九節で構成されている。章・節は次のとおりである(末尾の数字は著者の引用著書・論考の点数)。

- 一、首長国家群の誕生(弥生時代終末期) 12
- 二、大王の国家(古墳時代) 四〇六世紀の日本、四〇六世紀の九州 26
- 三、律令国家の誕生(飛鳥時代) 七世紀の日本、七世紀の九州 23
- 四、「流求国」は沖繩のことか(七世紀) 『隋書』流求国伝、「布甲」を「夷邪久人のもの」と見たことをめぐって、「夷邪久」流求」説の検討、「流求国」の自然・習俗・社会、『隋書』の「流求国」は沖繩諸島のことか、『隋書』流求国伝にみる沖繩諸島、「大琉球と小琉球」論

36

五、律令国家の展開(奈良時代) 八世紀の日本、八世紀の九州 21

六、『続日本紀』に現れる「南島」「南島」の記事、「南島」の範囲をめぐる議論、大和政権による「南島支配」 33

七、律令国家の動揺と再編(平安時代前期) 九世紀の日本、九世紀の九州 16

八、攝関Ⅱ藤原政権(平安時代中期) 一〇世紀の日本、一〇世紀の九州、一〇世紀前後の奄美諸島 22

九、一〇世紀までの沖繩諸島 木下尚子の「貝をめぐる九州との交易」論(二〇一〇年) 農耕、そして稲作はいつ始まったか、鉄の流入はいつか、開元通宝の流通、「階層社会」ということ、一〇世紀までの沖繩諸島 17

## 3. 「流求国」は「夷邪久」

『隋書』流求国伝(四章Ⅱ七世紀)の伝える「流求」は、現在の沖繩諸島を中心とする琉球であろうという説と台湾であろうという説等があつて未確定のようである。「琉球」であれば文献上の初出ということになる。

隋の大業三(六〇七)年、隋の煬帝の使者が流求に到ったが、「言葉が通じなかつたので一人を捕らえて帰った」、翌四(六〇八)年には軍隊を派遣して、中国に服従させようとしたが、従わなかつたので麻製の「布甲」(武具?)を奪って帰った、そのころ隋の朝廷に来ていた倭国の使者が布甲を見て「夷邪久国の人のものだ」と言ったという。

「音として通じ合う」という視点で、「流求Ⅱ夷邪久Ⅱヤク」に同調する立場から「鹿児島より南の島をばくせんと指す言葉として生まれ、しだいにその位置が限定・確定されていく過程で、ヤクとタネが分離し、さらにアマミ・トクが、そしてリュウキュウが分離し、屋久

島・種子島・奄美島・徳之島・琉球となつていったのであろう」と読み解いている。

さらに、大和朝廷の「南島支配」(六章Ⅱ七世紀末〜八世紀)で、律令国家の「領域に『国』または『島』として編成されたのは熊毛諸島(屋久島や種子島)まで」で、「奄美諸島の島々は、せいぜい『朝貢』地域とされた程度で」、「支配されたのではない」、「それより以南の沖縄諸島は、その『朝貢』さえしていない」と、種子島が大隅国に併合されるなど具体例をあげて詳述している。

なお隋書の記す「流求国」は、「今の沖縄諸島だったと考える」としながら、隋の「流求」情報はきわめて貧困で、「倭国」の情報と対比すれば歴然とした違いである、こんな記述を根拠に「当時の沖縄諸島を云々しても意味がない」と退けている。

#### 4. 緩やかな社会の変化

沖縄諸島は縄文時代から、漁労・狩猟・採集生活であった。日本列島が弥生時代に入っても変わらなかつたが、九州などの弥生人は腕輪の材料となるゴホウラやイモガイを求めて往来していた。六〜七世紀ごろ鉄器も伝わり少しずつ普及してきた。八世紀に入り、日本列島へのヤコウガイの供給地となり、代替品の土器、鉄器、様々な技術も入ってくるが、社会の変化は未だ緩やかであった…。

十一世紀、日本列島は中世に移行し、武士の社会へ移っていく。「沖縄史も展開の速度を速め」た、「グスク時代」への移行を予見して、四三九頁の大著を閉じている。

(「宮古郷土史研究会会報」一九六号、二〇一三・五・十三)

#### 7. 来間泰男『グスクと按司』上・下巻

本書は、「シリーズ沖縄を読み解く」の第三巻である。かつては「按

司時代」と称し、近年は「グスク時代」とよばれている時期に当たる。

「沖縄の原始時代からの脱却過程と、そこから琉球王国が成立する直前まで」で、改めて「琉球古代」と名づけたいと提唱している。日本史のほぼ「中世前期」に対応する時期を読み解いた(「はじめに」という。上・下二巻、五章で構成されている)。

上巻は、序章で「日本史の『中世前期』と『琉球古代』を扱い、ついで三章構成となつている。一章「院政と武士の台頭(平安時代後期)」、二章「武士」とは何か」、三章「武家Ⅱ平氏政権(平安時代末期)」である。下巻は二章構成で、四章「武家Ⅱ源氏政権(鎌倉時代)」、五章「グスク時代」論から見る沖縄(一三〜一五世紀)」である。

#### 1. 「王国」形成は外部の影響

前記「はじめに」で、「本書で明らかにしたこと」を、およそ次のように明示している。①日本史において武士が登場する経過と契機、②沖縄史における「按司」は武士ではない、「戦い」があり、按司はその当事者であろうという程度の思い込みからきている、③按司が武士でないとなれば、「根城」とされたグスクも見方が変わってくる、多様なものがあるとの認識は広くされているが、のちには「城砦」「城塞」となり、戦いの施設とされている、しかし武士がいらないのだから、戦いを想定するのはむづかしく、「力と財のある者の象徴的な建造物」であつたらう、④中国・朝鮮・日本の動きと、それらとの交流・交易にくわえ、東南アジアの歴史も整理している、⑤それらの理解をとおして、「沖縄への稲作の伝来」(第一巻)は十一世紀以降、中国から直接伝わってきたであろう、と新たな理解を提示している、⑥琉球王国の成立は、「沖縄社会の内からの熟成の延長線」上ではなく、「考古学等の成果を踏まえ」て、「外からの影響」によるものである、以上のような理解から、⑦「沖縄史の時代区分を「琉球古代」「琉球中世」

「琉球近世」と称したいとの新たな提起もしている。

こうして以下全五章の展開は、前二巻同様おびただしい量の著書・論考を読み解いて、諸説を引用しながら、具体的に詳述している。もっとも本命はあくまで五章の「グスク時代」であり、一〇四章はそこへ導くために、琉球・沖縄に影響を与えたとみなされる周辺諸国・諸地域の動向の読み解きである。それらが相乗的に影響し合って、琉球王国は成立したということである。

## 2. 武士は「高貴な」イエから

「武士は反乱や紛争解決の手段として、律令国家が養成した武官＝軍事貴族に起源を持ち、しだいに特定のイエに独占化されていった。武力を持つて戦うには、武器の確保と、その使用訓練と、戦術の鍛えが必要であり、それは代々子孫に継承されていった」「武家の棟梁の成立」は、「イエの成立と対応したもの」で、「源氏・平氏・藤原氏など、天皇や高級貴族の血を引く『高貴な』イエの出身であることが求められた」、「荘園や公館を管理する任務を負うようになり、国家の「格上げ」もあって、次第に「権力の中枢に近づいてい」き、「在地領主としての性格をもつようにな」った、「武力をもっているが故に」、「自主性を強めていった」とみなしている。

そこから沖縄は、「荘園も形成せず、イエも成立せず、武力で戦う対象もないような、沖縄」だから、武士は生まれようもなかったのだ、という見解が導きだされている。

さきの世界大戦中、国民学校初等科五年生のとき、「国史」上を学んだ。現在の「日本史」の授業である。そこに「源氏と平家」という項があった。なぜ源氏は「氏」で、平家は「家」であろうかという疑問をもった記憶がある。そのまま成人してしまったが、著者は高橋昌明『平家の群像』を読み解くなかで、「保元・平治の乱」のころ、平

家は「中央政局を左右する政治勢力に成長し」ており、「当時の源氏と平氏を、源氏と平家と呼んでも、源家と平氏とはいわない」、平家が「上流貴族の『家』の格として源氏に勝っていたから」だとの説を紹介している。少年のころの素朴な疑問が解消された思いである。

## 3. 「階層性」も外部から

十一世紀に入ると、日宋貿易等の影響もあって、「ヤコウガイやホラガイ、硫黄などの南島物産の調達のため」に、九州の公的機関や私的商人らが奄美・沖縄から、宮古・八重山諸島まで入り、「琉球列島全域において文化的社会的変容が引き起こされた」、このような「外来集団」は「日本からの集団」だけでなく、「その系譜につながる人々」であった。これらの人びとは世代を重ねるにもなって、土着的要素を強めていき、十三世紀ごろには「従前から居住していた狩猟・漁労・採取を生業とする人々を取り込」んでいった、との見解である。「階層性」もこれら外部集団が持ち込んだであろうというもので、琉球王国の「内発的發展」説への批判になっている。琉球・沖縄史における従来の考え方に対し多くの異なった指摘をしており、刊行早々から話題をよんでいる。

本シリーズはこのあと、「琉球王国の成立」「成立後の琉球王国／琉球中世」「薩摩藩支配下の琉球王国／琉球近世前期」「同／琉球近世後期」「琉球処分前後」とつづくもよう。

(「宮古郷土史研究会会報」二〇二号、二〇一四・五・十三)

## 8. 「大宜見猛」『日本民族大移動』

本書は、日本民俗学の創始者として知られる柳田國男の晩年の著書『海上の道』等に触発されて生みだされたものであろう。

柳田の『海上の道』では、原始、日本人の祖先が中国大陸南部を旅

立ち、日本列島に入った最初の土地は宮古であろう、とロマンにみちた壮大な構想が展開されている。海流と季節風によって、宮古にたどり着いたであろう人びとは、周辺海域に無尽蔵に産する宝貝を発見する。秦の始皇帝(西暦前221年)によって通貨が誕生する以前は、大陸では宝貝が通貨として用いられていた(経済用語に「貝」が付されている理由)。

人びとは宝貝を大陸に送り出す新たななりわいに従事するようになる。そのうち大陸では通貨が登場して、宝貝を送り出す必要がなくなったとき、人びとは当初から持参していたイネの適地を求めて、島伝いに北上していったという、ロマンにみちた壮大な仮説である。

著者は、「日中韓台の基層民族が同一」という観点から、埴原和郎の「日本人は縄文人と弥生人の二重構造」説を紹介しつつ、琉球・沖縄の人びとの祖先は、伊波普猷の九州から来た「南下説」、柳田の南から来た「北上説」の両説あることを紹介した上で、北上説に依拠しての持論の展開である。

関連する多くの参考文献を引用しつつも、アジアの高原地帯に始まり、各地に拡散していったなかで、現在のインドネシア共和国からフィリピン一帯にかけて存在し、海進で水没したとされる「スンダランド大陸」に定住した縄文系の「天皇家を首長の血族集団アマ族」が宮古を拠点に、定住の地を求めて全国に広がっていった、いまだ宮古に逗留しているところ、沖縄本島にあって宝貝採取に従事していた古代中国の殷(いん)の国に属する周の国(弥生系)の皇太子太伯(たいはく)が天皇家の皇女と婚姻して、「奴処(ナーク)」の国を建国した、ナークは「宮処(ミヤーク)」と同義語で、宮に奴を当てた、というものである。

その後、両者は沖縄本島に移り、天皇家は玉城を中心に、奴の国は

那覇を中心に国造りを始めた、との認識である。

それから1200年後の2世紀ごろ、北九州で弥生系の「倭の百か国」は大動乱となり、奴の国の女王卑弥呼が残った30か国で「邪馬台国」を建国し、天皇家に服属した。「弥生期を通して、貝産業の成功で戦費を始めヤマト統一のための準備を整えた」天皇家は、3世紀ごろ「東征出陣で、沖縄の伊平屋島を進発して、日向に向かった」と記している。いわゆる「神武東征」の神話であるが、周知の日本史の展開とは異なった沖縄・日本史の姿が、それなりの「史料群」によって示されている。著者の思いは本書のサブタイトル「沖縄から一望千里!この国の始まり」に凝縮されているようだ。

東洋史はおろか、日本古代史についても浅学ゆえ、著者の意図するところを十分に汲みとっていない弱さもあるが、生を受けた宮古を熱愛する著者の、宮古への限りない「ロマン」として読ませてもらった。史料不足に悩む歴史家も時には「作中人物を創作できる作家がうらやましい」とぼやくこともある(吉村武彦「歴史研究者の『ぼやき』」という。請われるままに記したが、浅学ゆえの読みの弱さ、理解の不十分さはお赦しいただきたい。

(「宮古毎日新聞」二〇一六・七・三)

## 9. 新里 博 『宮古古語音義 付録 宮古方言概説』(上)

著者は伊良部・長浜の出身。学問したくて十四歳で上京、様々な職業をへて、四十六歳で大学に入り国語学を専攻。宮古方言へのこだわりを己れの学問の課題として五十余年、大学院まで進み解明につとめている。一九六七年七月まで八回にわたって帰郷、そのつど一定期間滞在して故郷長浜はもとより、平良・池間・大神・多良間に至るまで宮古全域二十集落で、徹底した聞き取り調査をおこなっている。

ことわざは、「ことばの精華」「文の精粹」であり、古いことわざ(古諺)は、言語共同体の文化などを知るうえで、また、「言語研究のうえで」重要な資料であるとの認識による成果である。「宮古古諺義」(四一九頁)と「付録 宮古方言概説」(一八四頁)の二部構成で集大成されている。

宮古古諺音義は、「危み旅は かげ旅」に始まって、「夫をば 仰向にて覚める、妻をば 俯向きて覚める」まで一一五点の古諺を共通語への読み替へと、本来の方言読み、国際音声記号(IPA)の三通りで表記五十音順に配列している。そのうえで、「通釈」「語釈」「音釈」「評釈」をくわえ、さらに「参考」としてその古諺の用いられる場、地域別の異形として長浜以外の十九集落での用例をあげ、いっそうの理解をたすけている。末尾には「共通語・宮古方言間の音節対応関係図表」と「同語・句」まで例示している。

周知の「上がり太陽をど 拝む」(アガル テイダオド アガム)の通釈は、「世間は冷厳なもので昇りつつある太陽ならぬ、朝日のような勢いがあったて将来性のある人物)をこそ敬い拝む(のであり、過去にどれほどの名声を博した者だったとしても、それが落ち目になつたら見向きもしないものである)」とし、語釈では、「アガル」は上がり、「テイダ」は太陽・日輪で、「アガルテイダ」は複合名詞、「昇りつつある太陽の意」であるが、ここでは「昇りつつある朝日のような勢いがあったて、将来性のある者(支配者)」の比喻ととらえている。「を」は動作の対象を表わす格助詞、「ど」は文語文法の係助詞「ぞ」とほぼ同じ機能をもつ係助詞で、上の語句を特に取り立てて強調し、文末の活用語を係結関係によって連帯形結びにする、など。音釈では「テイダ」の語源について、「天道」「照ら」の両説から説明するとともに、共通語のワ行音の半母音(W)は、方言では原則的に子音(B)に

対応する、と多くの用例を示している。評釈では、ニイリ(神歌)等に依拠しつつ「世間は現実的で冷厳なものだから、過去の栄光を思わず、ただただ自分の足下をよく見ろ」という戒めであるように思える、と記している。さらに参考では、この古諺がどのような場で用いられているのか、地域的にはどう変化しているかなど、他に類をみない詳細さである。以下のような手順で、「後だまど 大だま」家習ひど 外習ひ」など、一一五例の古諺を説明している。

五十音で作成された「共通語・宮古方言間の音節対応(含む変化関係図表)」は、初の試みであろうか、宮古方言に関心をもつすべての人に益することであろう。(「宮古毎日新聞」二〇〇三・六・一〇)

#### 新里 博『宮古古諺音義 付録 宮古方言概説』(下)

「付録 宮古方言概説」では、冒頭「共通語」と「方言」について定義づけている。共通語は、日本語に限って言えば「日本語圏全域に共通する自然言語」、方言は「日本語から発生しながら種々の歴史的な言語変化の要因によって共通語と異なる言語体系に変化し、一地方だけに通用している地方語」を指す、と。序説、宮古方言圏の通時的な言語情報概観、宮古方言下位区分小方言の分類、語法概説、親族語彙・宮古方言研究の課題(結びに代えて)、以上六つの柱立てである。序説で、宮古方言とは、宮古八つの島々で「主要な日常生活語として通用している言語」であり、言語学的には日本語圏内の一方言に位置づけられる、としたうえで『全国方言辞典』(平山輝男編)によって、日本語は本土方言と琉球方言の二つに大別でき、琉球方言は奄美・沖縄方言と先島方言に、先島方言は宮古、八重山、与那国の三方言からなる、としている。

さらに日本語はいつ成立したのか、琉球方言は日本語からいつ分離したのかについて、服部四郎『日本語の系統』(一九七一年)、中

本正智『日本語の原景』(一九八一年)等から、日本語は弥生時代に北九州を中心に成立、奈良朝以前に本土方言と琉球方言に分離した、また、柳田國男の方言圏説「語の改変は先ず(その言語圏の)文化の中心地に起こり、その新しい語(または言い方など)は(その言語圏の)文化の中心地よりも遠隔辺鄙な地に残存する割合が高い」にふれつつも、日本語は弥生期に成立したとの従来の学説に久しく疑問をもっていたが、小泉保『縄文語の発見』(一九九八年)に、ある啓示を受けたようである。

—考古学や人類学が縄文時代と弥生時代は連続していると主張しているのに、(言語)系統論者は確証もないのに、両者は断絶していると決めてかかっている、との前提で、縄文・弥生語について詳細に跡づけている。結論だけ要約すると、日本列島の縄文語は一万年ほど前に形成され、二千年前に渡来人の勢力下で変形されて弥生語が生れた、やがて縄文語は弥生語に制覇されて周辺部の東北地方と琉球列島に残存することになった、「琉球縄文語」が「本土縄文語」から分離したのは縄文中期—紀元前三〇〇〇〜二〇〇〇年ごろであろう。しかしこれらはすべて推論であり、日本語の成立と琉球方言の分離年代に限っては今のところ「未詳」という見解である。但し「琉球(宮古)方言は日本語圏内の一方言」であるとの学説は、チェンバレン以来の定説である。

宮古方言が琉球祖語からいっごう分離したのか、琉球諸方言のなかで宮古方言が首里語の影響を最もうけていないのはなぜかなど、著者の力説するところだが、紙数も尽きたので、宮古方言に寄せる著者の「自戒をこめた」思いを記して結びにしたい。

—宮古方言は、上・古代文献等に見られる古い倭語(日本語)の言語諸要素を多分に保存している、その類似・合致の度合は、上代に遡

及するほど比例的に増加する、古い倭語についての知識を欠いた宮古方言研究は、ほとんど信頼できる成果は期待できない—。

これほど宮古方言の貴重さを立証した類書を知らない。しかも一般読者にもわかりやすい著書である。

(「宮古毎日新聞」二〇〇三・六・十一)

#### 10・栗田文字『藁算<sup>わらざん</sup> 琉球王朝時代の数の記録法』

「結び」の研究として広く知られている栗田文字氏が、このほど『藁算<sup>ざん</sup> 琉球王朝時代の数の記録法』を出版された。宮古では俗に「バラザン」とよばれ、前近代—人頭税社会において、読み・書きを許されていなかった庶民が生み出した、穀物や家畜などの各種数量の記録法である。水田が乏しくイネの入手困難な宮古ではカヤも用いられたようである。

「結びはすぐれて人間的な営み」であり、「火の発見」に比定できるほどに、人と動物とを区別する重要な指標になりうるという(萩尾俊章「結びとワラザン(藁算)」)。結びとは、「二つ以上のものを一つにまとめる技法」で、さらに新たな価値を生みだしている。紐や縄、帯、ロープなどの結び、船の綱、風呂敷の結びなど、時代や職業、民族、その他各面にわたって多様で、古くから世界的な広がりをもっているようである。

ワラを結ぶことで数量を示すのが「結縄」であり、明治期、田代安定の「沖縄結縄考」で広く知られるようになった。しかしあれから百余年、田代が収集した現物はもはやなく、あっても傷みが激しく実態を知るには困難なようである。本書の著者は、田代の「結縄考」を読み解き、徹底した現地調査と古老の聞き取りによって復元し、写真と図版で紹介している。百余年前の田代を通じて民衆の知恵を現代に蘇

らせた、といえよう。

およそ三十年ほどまえ、飛鳥御嶽の「ウブプーリ」(粟まつり)を見学したことがある。「サラ・ピヤーシ」を見学するのが主たる用向きであった。集落の人たちが神前で円陣をつくり、お神酒をまわし飲みます。そのさい「サラ・ヌ・主」とよばれる男性神役が、神々をかべる神歌をうたいつつ一座の人びとに「ンク」(お神酒)をすすめる。これこそ「オトリー」の本来の姿であろう、と思いつつ見学させてもらった。

そのサラ・ピヤーシの前段ともいえる場面であった。かなり年輩の女性のツカサが、イビの前で両の手の平を上にして前方に差しのべて招くように上下させつつ祈っていた。しばしその敬虔な姿を見ながら、ふと「イビ」に目をやると、そこにはお神酒や菓子、果物等にまじって、ワラでつくったらしい一見トカゲ、否絵でみるタツノオトシゴ(?)様のものがいくつか供えられていた。どうやら話に聞く藁算との初の出会いである。後で知ったのだが、集落の各家庭の員数を奉納しているのだという。しかしそのときは用向き外とあって、そのまま見過ごしてしまった。

それから二十年近くへて、平良の博物館在職中、栗田氏が岡本恵昭氏の案内で来館された。日本で初めて開かれた「国際結び文化展」に準備委員として、書物や写真を頼りに「結縄」を作成し、出品したのを契機に、本格的に沖縄県の結縄調査、復元に乗りだしたもようである。そのときの話題に、いつか博物館で地元の皆さんとともに「ワラザン」を作り、博物館に寄贈したいと話された。

さらに一〜二年後の新聞報道で、県立博物館で「結縄」講座が催され、これまでに復元した作品のすべてが寄贈されていたことを知った。だが、栗田氏がかつて宮古で話されたことをちゃんと記憶しておられ

たのだ。退職後ではあったが、一九九七年十一月、九九年十二月の二回にわたって、平良の博物館を訪れ、それぞれ三日間にわたって博物館主催の「ワラザン」講座を担当しておられる。もとより復元した作品のすべては博物館に寄贈されたことも洩れ聞いている。

本書におさめられた結縄はすべて「創作」ではなく「復元」である」と明記しておられる。「素材と形」はもとより、何よりも「生活の中で藁算を使った人びとの心になって作らなくては、本当の復元はできない」との思いで「真剣に仕事に打ち込」まれたのである。

沖縄本島、宮古、八重山と全県網羅されている。宮古は収録順にあげると、人頭税末期社会の村名で、西里、福里、宮国、砂川、久貝、松原、洲鎌、保良、友利、野原、新里、比嘉、島尻、新城、嘉手苺、狩俣、東仲宗根、長間、下地島、国仲、池間島、来間島など、各村(島)の米、粟、馬、牛、豚、山羊等が結縄で示され、解説されている。田代の「結縄考」に準拠しての復元である。人頭税社会で、徴税役人に不当に多くだまし取られないよう、読み書きのできない庶民が如何に知恵を働かせ、身につけた「バラザン」であるかを知るほどに、畏敬の念がわいてくる。

併せて、復元作業を始めた当初のワラは農薬づけのため、爪は数日で軟く傷んでしまったという著者に、心から敬意を表する次第である。巻頭の上江洲均「序文」、萩尾俊章「結びと藁算(わらざん)」、工藤員功「フラインダーの向こうに見えたもの」は、本書の理解をいっそう助けてくれよう。宮古史に関心を寄せるすべての人に一読をお薦めしたい。

(「宮古毎日新聞」二〇〇四・十一・二四)

## 11. 岡本恵昭『宮古島の信仰と祭祀』

宮古郷土史研究会設立以来の会員であり、運営委員でもある祥雲寺

の岡本恵昭氏が、このほど『宮古島の信仰と祭祀』を刊行された。学生時代から数十年、宮古全域をじみちにコツコツ歩き、調査・研究した集大成ともいべき初の著作集である。三部・二十章で構成されている。A5判、箱入り・四七四頁、第一書房刊。

### 1、三部二十章構成

第一部「宮古島の世界観と他界観」は、宮古島からの発言、宮古島民俗文化研究の課題、他界観念の構造／根の信仰について、宮古島をめぐる海上の道、宮古島のシャーマニズム、の五章。第二部「宮古島の信仰と祭祀」は、冒頭に同名の「宮古島の信仰と祭祀」につづいて、狩俣部落の年中行事と祭祀、宮古狩俣の「祖神にーり」、狩俣村における結婚(ササギ)について、久松(久貝・松原)の年中行事／日取り帳の祭祀記録、の同じく五章。第三部「宮古島の伝承と習俗」は、宮古島の水と民俗、南島の妖怪について／宮古島の場合、葬送の習俗「魔よけ」、久松部落におけるキガズン墓とその葬法について、宮古島の民間信仰、葬送に関する慣行習俗語彙、宮古島の十六日祭、宮古島における「虫送り」の行事について、「縄ばい」のこと、平良市下里の婚姻、以上十章から構成されている。

各章には大方、節・項が設けられていて、章題について詳細に論述している。著者ならではの展開ぶりである。

### 2、「再生」の神観念

著者がこの三十数年、研究会等での研究発表や、地元紙誌等で発表してきた主題を知る者の一人としては、本書に設定された主題はすべて甲乙つけ難い本来の主題ばかりのように思えるが、ここでは紙幅のつごうもあり、第一部の第三章と、第三部の第一章についてのみふれることにする。

「他界観念の構造／根の信仰について」では、根の国の観念につい

て、ニルヤ・カナヤと遠来神、遠来神としての龍宮神、シナフカ・ユークイ祭りと来訪四神、南島宮古の他界観念の特質について、宮古島における他界観念の構造Ⅱ双分制及び二元的対立の世界観念・現世の社会と他界の座標について、結論として、双分観より三分制へ・三分制の他界観念、以上のような展開をみせている。―他界観念は「地と地底、天と地底の結びつきであって」これが、「根の信仰」であり、「死者が祖霊になる過程で、ニツジャズマ(彼岸)から、そのまま円環して、天上の聖の他界となる」、このように宮古の「神観念」は「常に再生するもの」、「スデル(生まれかわる)」という原理を持っている」との認識を示している。

さらに「天と地とソコの三つの分類は、垂直的にも水平的にも展開される」として、狩俣のクサテイ杜フムイを「聖の世界」、村落や祭場を「ミヤーク」、パイのスマを死後の世界(墓所)と、「三分制」を示しつつも、「天上他界のカミ、祖神を、地底からきた祖霊から分離し、聖の空間を固定しているよう」だとも言っている。

### 3、「産水」から「死に水」まで

隆起さんご礁の島は表土浅く乾きやすい。地表を流れる川もない。水道の普及以前の人びとにとつて、日々の暮しに必要な水にまつわる事柄はすべて宮古の歴史そのものだといっても過言ではない。「宮古島の水と民俗」では、水の確保、運搬、貯水、その用具、使用方法……、祭祀に至るまで詳細に展開されている。

水汲みの風俗、水の貯え方、水の保存確保の方法、水汲み用具、用具を造る人、天水・流れ水・泉の名称、洗濯用水と飲料用水、入浴のことなど、水の運搬、水汲みの変遷と井戸の歴史、水げんかと水祈願、シンボルとしての水、宮古島のシツ祭、シツ祭の内容、シツの「バームズ」、シツの「ユーサバリ」、狩俣村のシツの井戸ふさぎ、砂川村の



シツ祭、産水について、不老の水・若水・スデ水、死水の使い方、水の民俗、雨乞い祭事、アヤゴにあらわれた水の民俗、宮古島古来の泉とその由来、宮古島の降り井戸・泉・および所在と名称、以上二六項にのぼっている。

水は人びとの日々の暮しはもとより、産水(湯)から「死に水」まで不可欠のものであり、かつてはひとたび日照りがつづけばすべての集落で「雨乞いのクイチャー」が踊られる。そのためすべての集落に「水の主」や「リュウグヌ神」をまつる拝所が設けられている。そこから降雨を乞い願う一ひいては豊年願望の「直す世の雨よ 十日越や長さ 五日越 降りど見事」(直す世の雨は、十日越に降れば長さすぎる。五日越、六日越に降りだせば、見事なものだ)の「雨乞いのクイチャー」は宮古全域でうたい、踊られたのである。

#### 4、柳田国男「肩をなでる」

岡本氏は一九三八(昭和十三年)生。平良西里の臨濟宗妙心寺派の龍宝山祥雲寺の住職。岡本家としては、恵応(格外)―恵昌(南哲)につぐ三代めである。宮古高校(九期卒)から、父恵昌の母校である花園大学の哲学科を六一年三月卒業、引きつづき父母のもとで三代目をつくべく修行をしている。傍ら体調不良にもかかわらず、宮古全域を歩き民俗、祭祀全般の調査を徹底しておこなっている。郷土史研究会員であるばかりでなく、旧平良市の市史編さん委員、文化財保護審議委員、博物館協議委員として、現在宮古で氏ほどの分野の研究を深めている人はいない。

南島研究会(東京)を主宰する酒井卯作氏が、「刊行に寄せて」で「柳田国男先生が存命だとしたら、この綿密な記録の刊行を見れば、例の口ぐせで『背中をなでてやりたい』といったかもしれない」と記している。著者はじめ、宮古にとっても嬉しい讃辞である。

(「宮古郷土史研究会会報」一八三号、二〇一一・三・十二)

#### 12. 佐渡山正吉「沖縄・宮古のことわざ」

本書は単なる宮古のことわざ集ではない。ことわざの生まれた歴史的・社会的背景を考察することで、宮古の歴史や民俗までわけられている。いわば宮古史の入門書にもなっているのである。収録されたことわざは百点。十年ほど前に地元紙に毎週一回、二年近くにわたって連載したものである。その後、さらに各地の古老をたずねて方言の語源まで探り、あるいは『沖縄語大辞典』など各種辞典にあたっている。

その上でとかく難解とされる宮古方言の微妙なニュアンスを損なわぬよう、独自のカナ表記を試み、共通語と併記させる工夫をしている。

それらを可能にしたのは、幼くして父親を亡くし、旧藩時代農家に生まれた祖父のもとで普段にことわざを聞いて育ったこと、二つには、出生地が近代村落共同体の祭祀(さいし)や習俗の遺風をもつ平良・狩俣であること、三つめに、一九二七(昭和二年)生まれで、戦前を知る多くの古老に接し得たこと、四つめに、四十年近く教職にあつて宮古内ほとんどの集落を熟知していること、さらにその間、平良市史編さん委員、同文化財保護審議委員、宮古地区小学校社会科研究会長などをつとめ、宮古の歴史や文化、自然、風土について調査、研究を深めていることなどである。こうした活動をとおして、宮古のことわざが地域性ゆたかであるばかりでなく、普遍的な世界にあることを明示している。

「アトウダマ ドウ ウプダマ」(後の分け前が大分け前)は、「残り物には福がある」に、「イイクウトウヲ ピヤアマリ」(よいことは早く)は、「善は急げ」「思い立つ日が吉日」に通じよう。「イミサカラドウ ウプフナイ」(小から大になる)は、近代宮古で屋号「へ小(やま

こ」が、小さいものから山となるよう経営努力した「寄留商人」の歴史を伝えている。「カナスサドウ アパラギ」(いとしさが美しさ)は、カナスが「悲し」でなく古語の「愛(かな)し」と考察、「あばたもえくぼ」「愛情は欠点を見ない」などを紹介している。あとは直接本書を読んでいただきたい。

(「沖繩タイムス」一九九八・一二・十一)

#### 〈付記〉本書「帯」より

著者は、旧藩時代農家に生まれた祖父ゆずりの該博な知識を駆使して、宮古のことわざ百点をまとめている。しかも方言のもつ微妙なニュアンスを損なうことなく、過不足ない共通語の表現と並列させることに成功している。地元紙に二年近く連載したのち十年掌中の玉の如くあたたためて語源の解明と、それぞれの諺の生まれた背景―歴史と民俗まで考察した珠玉の結晶である。読者は、地域性ゆたかな宮古の諺が、広く普遍性をもっているのを目を見張ることであろう。

(一九九八・一〇・三〇)

### 13・伊良波盛男『池間島の地名 池間島の聖地』

#### 「池間島の地名辞典」

池間島在住の詩人・伊良波盛男氏がこのほど冠頭に「歴史・民俗・言葉が息づく文化遺産」とおいた、『新編 池間島の地名 池間島の聖地』を刊行された。時には確認のために同一地点に10回余も通ったというほどの力の入れようで、「池間島地名辞典」といってもいいほどに詳細をきわめている。

池間島の地名についてはすでに故人となられた伊良波富蔵、前泊徳正らによる先行調査・研究で、153が世に問われている。本書はそ

れを踏まえた上で、さらにそれに倍する350余を、関連する写真150点を添えて、臨場感をそそる解説を展開している。

表紙をめくって、まず驚かされるのは、巻頭を飾る写真である。2006年、著者の母校である池間小学校の創立百周年記念にさいして撮影したという池間の航空写真3葉である。1葉は全景、他の2葉は部分撮影で、ともにびつしり朱点を入れ地名が記録されている。人里近い2葉は地名多く詳細にわたるため全景の中に記入できず、別に切り取り拡大し記入したのである。

#### 社会生活の多彩さの反映

よく知られているように、地名は土地に刻まれた先人の歴史と言われている。人口多く、社会生活が多彩なほどに地名は豊富になるようだ。反面、人のくらしにかかわりのない所、人の往来のない所は大方名前は付いていない、と言ってもよさそうだ。その必要がないからであろう。人里近い2葉の部分写真は共に池間島南西部の海岸で、外海に向いた方は、アラッシッスウヒダからマイバイトウガイまで、目測およそ数百メートルの海岸に20余の地名がみえる。今一つの方はミジュンマ(水浜)からウハルズ御嶽をへて、アガイグスヌスウラまで、せいぜい半分の2、300メートルにみられるが、やはり20近い地名が記されている。地名の存在は、島の隅々まで人びとの足跡―暮らしが密接にかかわっているということを示すものである。なぜか池間島は近世琉球以来、近代に至るまで、人口増加の目立つ地域である。

地名は池間島の伝統的な神事である「ユークイ」のさい、神女らがウハルズ御嶽の夜籠りに始まって、夜明けとともに聖地を巡拝する道筋に沿っている由。しかもたんに地名の列挙ではなく、著者が標題の冠に示すように池間の歴史、民俗、神事、歌謡、方言…、等々、池間島を明示する全般にわたっての解説を試みている。柳田國男、仲松弥

秀、大井浩太郎、谷川健一……ら先学の学説を紹介しつつ、多くの文献が引用されている。琉球正史の「球陽」はじめ、宮古旧記類、『南島歌謡大成』『宮古篇』『古語辞典』『字訓』、さらには「万葉集」からは大伴家持の歌まで駆使しての池間島の地名解説である。もとより著者が教えを乞うたであろう吉浜玄長ら、地元の高齢者も数多く登場している。

#### 「ヤマトの国」から…

著者独自の修辭も興味深く読ませてくれる。「わが伊良波家は、マツブー(間津の入江)岸边に楚々と建つ」、「宮古島狩俣のヒヤウナ(西平安名崎→北平安名崎/蛇崎)が一望のもとにながめやれる」、池間島から見る荷川取の「砂山は、ツスニューサヒダ(白鷺浜)」とよばれていて、「民謡『白鷺浜節』を作詞してみたい衝動が沸々と湧く」、池間大橋の狩俣側は「世渡(瀬戸)崎」、池間島側は「マサダツヌスウラ(「間坂崎の地先」と言うように、「世界一美しい」この海域を見に、「胸中を吐露し」など、思わず微笑をさそう地名解説である。

池間島の350余の地名、関連する150点の写真を通して、池間島の人びとの暮らしの足跡から学ぶことは少なくない。著者には本来の詩集10余冊のほか、本書と同巧の『池間民俗語彙の世界』宮古・池間島の神観念(2004年)、『池間民族屋号集』(2005年)がある。併せて読むことをお勧めしたい。池間島が「大陸」に思えてくるから不思議である。(「宮古毎日新聞」二〇一〇・一〇・二八)

#### 14. 県立芸術大学・鎌倉芳太郎「ノート篇」

沖縄県立芸術大学附属研究所はこのほど同大学附属図書・芸術資料館所蔵「鎌倉芳太郎ノート」を整理して、『鎌倉芳太郎資料集(ノート篇1)美術・工芸』を刊行した。A四判、八三六頁からなる部厚なも

ので、宮古関係資料も数多く収録されている。

一九二五(大正十四)年〜三七(昭和十二)年迄、鎌倉芳太郎が沖縄調査のさい収集したすべての資料はご遺族から、県立芸大に寄贈されている。「専門の染織を中心に美術工芸領域から、建築・文学・民俗・芸能・歴史と多岐にわたっており、「近代の沖縄研究の歴史上、個人研究者が収集した資料としては最大にして最高の質を示すもの」(同書「刊行にあたって」とみなされている。資料は大別して、「文献関係資料」「紅型関係資料」「写真資料」の三つの領域に分類されるように、同大学附属研究所では、「資料の重要性和文化遺産の共有化という観点から」公開に向けて鋭意整理し、刊行事業を計画したものである。一九九六(平成八)年度から刊行を始め、『鎌倉芳太郎資料目録』(一九九八年)について、『鎌倉芳太郎資料集』第一巻(二〇〇二年)、同第二巻(二〇〇三年)を刊行している。ともに「紅字型紙」集である。

今回刊行された「鎌倉ノート」は、「沖縄の美術・工芸研究のために文献資料を渉猟し、尚家などの旧家の所蔵する美術工芸品を写真撮影、実測調査するなどした時の調査ノートや沖縄各地の民俗調査の折りに作成したフィールドおよび歴史資料集の筆写ノートからなる」八十一冊を全四巻構成で分類、整理し第一巻として刊行したものである。そのほとんどの原資料は既に失われており、それを「再び眼前に蘇らせることを目指した仕事である」とさきの「刊行にあたって」で、波照間永吉同研究所長は記している。引きつぎ第二巻「民俗・宗教」、第三巻「文学」、第四巻「雑纂・索引」の順で刊行されるもよう。第一巻に収録された宮古関係資料の項目は次の通りである。

1、ノート4(工芸・雑工、金工)Ⅱ宮古島御規模帳、宮古島蔵元公事帳、宮古島所遺座例帳、宮古島鍛冶例帳

2、ノート5(美術・紋様、工芸・陶磁工)Ⅱ宮古島御規模帳

3、ノート7(工芸・染色工2) ≡ 宮古島貢布之事、宮古島御規模帳、宮古島御規模帳(新奥書)、宮古島御規模帳(旧奥書)、宮古島蔵元公事帳、宮古島小与(座)公事帳、宮古島総横目座公事帳、宮古島仕上世座例帳、宮古島諸村公事帳

4、ノート8(工芸・染色工3) ≡ 沖縄県旧慣租税制度 第四章 宮古島(第一)正租―賦課・反布織立及ヒ其監督・徴収・怠納処分、(第二)夫賃、宮古島関係史料抜書、宮古島諸物代付帳、宮古島諸村公事帳(続キ)、宮古島仕上世座公事帳

5、ノート12(工芸・染色工A) ≡ 宮古島所遺座公事帳、宮古島勘定座公事帳、宮古島船手座例帳

6、ノート27(雑ノート2) ≡ 宮古島ノ入墨

「宮古島貢布之事」では、貢布代付、貢布製シノ儀ニ付厳達、貢布分頭割、貢布丈尺定、貢布其他賦課法、貢布製シ方、貢布織立方検査等注意方達、貢布名称並丈尺、貢布割付方手続、上中下布ハ拾反ニ付老反宛毎年織増ヲ為サシムル、貢布ニ用ユルカセ取扱、貢布割付、以上の項目が冒頭にあつて、詳細な内訳が記されている。史料抜書の「貢布代付」では、「拾九舛縮布老反長七尋老尺幅老尺六寸」は、「代白上布ニシテ式疋四尋式尺」代栗老石六斗八升、「代錢百五拾八貫四百文、但縮代同断」「銀ニシテ四拾九匁六分」(同治十三年甲戌十二月、原宮古島諸代納附帳)といったぐあいに列記されている。また、工芸関係資料の宮古島所遺座公事帳(同治十三年甲戌十二月―宮古島蔵許)では、「所遣役与人老人目差老人筆者三人都合五人十二月代合之事」とあつて、さらにその業務内容が記されている。宮古島勘定座公事帳では「勘定役与人式人目差式人筆者三人定勤申付筆者三人六月代合之事」などがある。

久米島資料抜書の中の「宮古山、船立嶽の由来」は、「御嶽由来記」(康熙四十四―一七〇五年)の原資料であろうか、全文漢文で記されている。「由来記」冒頭の「昔神代に久米島按司とやらん人老人の娘あり七歳之頃より朝夕月天日天を願けりは天道感に応則チ自在通を得て万事の吉凶一事も不違占ひ申候」とあるのは、「昔姑米島有一按司産下一女此女聡明敏捷才貌兼美自年七才常拜日月崇信仏神万般吉凶尽皆予知」となっている。兄嫁のざん言を真に受けた父按司の怒りにふれて島流しにされ、妹を哀れに思つた兄と共に宮古の漲水に着いて船立の地に居住し、長じて住屋の里の「かねこ世の主」に嫁いで九人の子をなし、のち久米島の父の誤解も解けて、鉄鋼と鍛冶の秘書を授けられ、兄はこれによつて宮古に鉄の農具を広めて生産を増大し豊饒になつた、とつづくくだりはまったくそのままである。久米島の原史料から宮古が写しとつたということなのであろうか。

ともあれ、こまかく目を通していけば宮古では既に失われた史料の数々を「鎌倉芳太郎資料(ノート)」は教えてくれそうである。巻末に編集・校正の協力者八人の名が記されているが、田名真之、得能寿美、栗国恭子さんらもみえる。

(「宮古郷土史研究会会報」一六六号、二〇〇八・五・一五)

## 15・宮国文雄『宮古島民台湾遭難事件』

宮国文雄氏が「宮古島歴史物語」(1)の表題のもと『宮古島民台湾遭難事件』を著わした。本書に扱われている事件は、一般に「春立船遭難」あるいは「台湾遭難事件」ともよばれている。戦前には、『宮古史伝』(慶世村恒任・一九二七)、『南島』三集(一九四四)、戦後には『宮古島庶民史』(稲村賢敷・一九五七)、『沖縄の歴史』(比嘉春潮・一九五九)、『平良市史』第一巻通史編一(一九七九)、同第三巻資料編

一(一九八二)など、ほとんどの史書に収録され、今なお古老に語りつがれるほど、その大要は宮古ではよく知られているといっても過言ではなからう。しかし、事件の全体像とともにその後の遭難者の墓地の整備、管理など、現在に至るまでの推移を一冊にまとめたものはこれまでになく、今回の宮国氏の『宮古島民台湾遭難事件』をもって嚆矢とされよう。

近代日本の草創期に宮古が登場する出来事が三つある。年代順にあげると、一つは一八七一(明治四年)十一月、首里へ貢租を輸送した春立船が帰途、台風で台湾南部に漂着、乗員六九人のうち五四人が惨殺された、いわゆる「台湾遭難事件」、二つは、その二年後の一八七三(明治六)年八月、同じく台風で宮国沖合の干瀬に座礁したドイツ商船ロベルトソン号を救助した事件で、この方は三年後の一八七六年二月、ドイツ皇帝から感謝の記念碑が贈られ、その後の第二次大戦を通じての日独同盟、ひいては今日の上野村ドイツ文化村づくりへと発展している。三つめは、一九〇四(明治三十七、八)年日露戦争時の五月、ロシアのバルチック艦隊発見について石垣島までサバニで渡り、大本营へいわゆる「敵艦見ゆ」を打電した「久松五勇士」の話題である。

三つの出来事のなかで、最初の春立船の遭難事件は、のちに近代日本の始めての外征「台湾征討」にまで発展した事件であり、同時に中国皇帝の冊封をうけつつ、他方では一六〇九(慶長十四)年以来薩摩藩を介して幕藩体制にくみこまれていた琉球王国の地位を確定する「琉球処分」に向けての一連の作業を促進した重大事件であった。

宮国氏は本書執筆の動機について、幼少時「父母や祖父等から台湾遭難事件」についてよく聞かされた、さらに二十数年前の一九七一年大阪在住時、たまたま路傍の夜店で見つけた一冊の本で改めて「台湾事件」を知らされ、以来関係資料の収集が始まった、『南島』三集、

『琉球王朝史』(川平朝申)等入手、祖父らの伝聞と「照合を試みながら忘備録的に資料をまとめて」いた(まえがき)が、一九九〇(平成二)年台湾観光にさいして昭和初期高砂族の抗日「霧社事件」について日本人観光団にへつらうガイドの説明に、「台湾遭難事件」がこのようななかたちで「大衆に知られるのはたまらない」と考える、一九九七(平成九)年一月、宮古(高雄)直行チャーター便で現地を訪問、二〇〇〇年へたいまも「琉球藩民五十四名之墓」が現地の人びとによって大事に守られていることを知って、いよいよ執筆の思いを新たにす。同年四月、取材のため改めて現地に飛び、関係者の子孫に直接対面、その後数か月を費やして執筆にあたった(あとがき)という。

本書は七章構成である。第一章「遭難の顛末」で一八七一(明治四)年十月十八日、首里王府に貢租を納入して帰途についた宮古の春立船——平良頭忠導氏玄安ら六九人乗組み——が途中風待ちのため慶良間に寄港、二十九日出港したが、同夜半台風にあつて十一月六日台湾南部の八瑤湾に漂着した。上陸にさいして三人は溺死、六六人は人家を求めてさまよううち、当時は「首狩りの風習の残る村」高士佛(クスクス)や牡丹社の住民によつて五四人は惨殺され、必死にのがれた二人は漢人の凌老生、揚友旺、林阿九、鄧天保らに救助された。台湾府から福州に送られ、翌一八七二(明治五)年六月、帰唐船で那覇へ帰った。こうした遭難から生還までの経緯が遭難者並びに生還者の氏名とともに詳細にまとめられている。

第二章「台湾征伐」では、生還者の報告で事件を知った鹿児島県参事大山綱良らの報告をうけた明治政府が、「台湾征伐」をめぐる賛否両論の末、最終的には陸軍中将西郷従道を都督として、一八七四(明治七)年五月軍艦四隻で三六〇〇余の兵を率いて台湾へ向かう。出兵にさきだつて明治政府が清国政府に抗議したところ、台湾は清国領だ

が、琉球人を殺害したのは「化外の民」であるとの回答を得て、「問罪の師」派遣となったものである。西郷都督らの牡丹社等制圧の一方、大久保利通全権弁理大使は北京で清国政府と交渉、遭難者遺族への賠償金等を出させている。明治政府は事件処理後、琉球藩の取扱いを外務省から内務省へ移管、本格的に「琉球処分」に乗り出した。

第三章は「遭難者の墓の変遷」で、西郷都督らによる遺骨の収集と墓地の改修、明治期、大正末期～昭和初期、在台沖縄県人会の墓碑改修と遭難者氏名の調査、さらに戦後の宮古市町村会等による墓地改修までふれている。第四章は「頭骸骨の帰郷」、第五章「墓参」、第六章「事件の地訪問」を記述し、第七章に資料編を設け、本書で引用した『平良市史』等の関係資料のすべてを収録、一層の理解をたすけている。

なお著者は「あとがき」で「本書を世に出す最大の目的は、琉球・台湾の末長い友好と人々の善意の積み重ねを多くの人々に知ってもらいたいためである」と記している。

(「宮古郷土史研究会会報」一〇七号、一九九八・五・一六)

### 16・川上哲也『カツオ万歳!池間島カツオ風土記』

本書は表題どおり「漁業の島・池間」のカツオ漁にまつわる歴史、現況に至るすべてを網羅した池間島風土記である。同時に、著者のふるさと池間島とそこに関わる人びとへの熱い思い、真情の書である。「この島で生まれ育った者にカツオと無縁の者はいないはずだ。それほどに池間のカツオ漁は隆盛を極め、島人の生活と切り離せないものだった。人々は航海の安全を祈り、神や自然に感謝した。そこから歌が生まれ、踊りが生まれ、祭りが生まれた」(「はしがき」)と記している。みじかい言葉の中に池間島の歴史と文化の全体像を言い尽くし

ているように思える。

カツオが支えた宝島池間、ふるさと池間島のカツオ漁物語、ふるさとの海はふるくからの贈物、死と恐怖の漂流、海難史でつづる人間模様、少年時代の原風景、隠れた偉人たち、島に眠るもう一つの文化遺産、以上八章構成である。各章ともに独立した章立てながら、互いに関連し合い、カツオ漁できざいた池間島の近・現代史を臨場感あふれる筆致で描いている。

池間島のカツオ漁は宮古農民の果敢な上京・請願運動で人头税が廃止された三年後の一九〇六(明治二九)年、鹿児島県出身・鮫島幸兵衛の指導で始まっている。それからわずかに三年後の〇九年八月、池前漁業組合が設立されたが、生涯漁業一筋に生き六女二男を育てた著者の父・故川上金之蔵はその前々年、カツオ漁二年めに生まれている。このようにカツオ漁は池間島の近・現代史を語る上で欠かすことのできない重要な産業であるばかりでなく、著者一家の歴史そのものなのである。

盛業期には漁船十四隻、乗組員四百四十八人をかぞえている。さすがに池間島だけでこれだけの員数をそろえられず、狩俣、大神、佐良浜、久松等からも乗り組んでいたという。

十年ほど前になろうか。著者は一九一〇(明治四十三)年生まれの母上・故メガの米寿を祝って記念誌『おかあ』を上梓された。そのとき請われるままに推薦の拙文を寄せたことがある。「池間島は離島の中の離島、小さな島なのに、時として宮古本島はおろか、「大陸」と見まがうばかりに、豊かな歴史と文化をもち、話題に事欠かない島なのだ。川上君と話しているとそのような錯覚にとらわれる」と。

それ以前、それ以後もともに著者は池間島にまつわる多くの著書・論文を発表しているが、それらの著述を手にするごとに、あのとときの

「池間大陸」が脳裏をかすめる。

本書はそれらの著述の中から表題にそって数編抄出し、さらに新たに幾つか書きおろしを加えての上梓である。文字とおりカツオ漁を中核にした池間島風土記をなしている。

著者がもつとも敬愛する教育界の先輩であり、在職中は職場の上司でもあった大山高春氏はかつて「川上君の池間島とそこにまつわる人々への思いの深さと温かさは、読む者をして、しみじみとそしてほのぼのと読後感に浸らせてくれる」と賞賛しつつ、さらに次のように記している。「川上君は国語教師として夙にその名を知られているが、文才にも秀でている」、しかし「歴史の研究や考究や記述には不慣れの面もうかがえる」「時間をかけてさらに調査研究を深め、将来、本書の歴史書としてまとめていくことを期待したい」と(『伯父史を語る』つむかぎ一九八八年)。本書は、大山先輩の期待に答える一書にもなっているのではなからうか。

カツオ漁は集団によって成り立っている。その団結力が大正期、宮古・八重山でコレラが大流行して多くの犠牲者が出たとき、池間島は漁業組合を中心に海上を封鎖し、一人の犠牲者も出さなかったであろう。通読してこうした知恵と勇気を持ちながら、地位や名声を求めなくてもない庶民群像の赤裸々な姿に感動させられた。著者の労をたたえるところにも、今後とも池間島に寄りそって継続・紹介されることを期待するものである (『宮古毎日新聞』二〇〇七・三・一〇)

## 17・砂川玄徳『宮古の新聞百年史』

周知のように現在宮古に本社をおく日刊新聞は二つある。そのうちのひとつ『宮古毎日新聞』は二〇〇五年九月、創刊五十周年の記念すべき節目を迎えた。戦前戦後を通じ宮古の新聞では最長の記録である。

同社はそれを記念して、一九五五年九月創刊当初のころ同社に籍をおき、その後とも様々な形で同紙に関わってきた砂川玄徳氏に委嘱して、先ごろ『宮古の新聞百年史』を刊行した。もつとも同社の設定した主題は文字どおり「宮古毎日新聞五十年史」であつたようだが、著者は、社会の公器として宮古の近代化に貢献してきた新聞の果たした役割と使命を考えれば、「宮古毎日新聞の五十年も、こうした新聞や民衆の織り成してきた歴史の中で捉えることで、その存在の大きさを再確認できる」と、表題に改めて執筆したと「はしがき」に記している。著者の気概のほどを示すものであろう。

そのため本書は前近代から現在までを対象に十二章構成で、各章は八〜十二項から成り立っている。高校生のころから、芥川賞をねらえる文筆家を志し、社会人としての出発も新聞記者、のちに地方自治に関わるようになって、ほとんど企画や政策畑に身をおいてきたせいか、全巻読者の興味をそそる章・項立てである。俗に「新聞記事は三度読まず」というが、それを地でいっているようだ。読者は紙面を開くとまず「見出し」を追う、ついで興味をひいた見出しの「リード(流し)」を読み、さらに興味ある「本文」へと移る。読者心理をうまくついでおり、読み始めたらず途中で頁を閉じるのが惜しいと感じさせるのは、自他ともに許す著者の筆力の確かさであろう。ここでは紙幅のついで「章」のみすべて紹介して、「項」については、二、三に止どめたい。

第一章 言論弾圧と暗黒政治、第二章 文明開化への道遠く、第三章 権力批判への胎動、第四章 自主自立への挑戦者たち、第五章 新聞と政治の相関関係、第六章 言論統制への回帰、第七章 日刊紙への挑戦、第八章 公器と利器の狭間で、第九章 流浪と苦闘の時代、第十章 続・流浪と苦闘の時代、第十一章 起死回生への二人三脚、

第十二章 果てない自立への挑戦、以上十二章である。

第一章は、人頭税は変則的奴隷制、惣横目本村朝祥の決断、汚職追放と行政改革、人災・天災に泣く多良間、多良間の五義民壮途へ、英雄達の悲しい末路、本邦初の祖国復帰論、琉球独立党が消えた、薩摩と地元の対立激化、薩琉の権力闘争中で、歴史は歪曲されたか、以上十一項で詳細に論述している。近世末期、宮古史上よく知られた割重殺事件、多良間騒動、落書事件等を取り上げて、「人格に目覚めた民衆と旧勢力の対立が表面化した」「歴史的にも特筆すべき」事件と捉え、当時言論機関があれば又違った展開をしたであろうことも示唆している。

第二章では、一八七九(明治十二)年廃藩置県後の、偶発だったサンシー殺害、自由民権運動と人頭税、中村十作兄弟の戦術と戦略、新聞で世論形成に成功、など十二項で宮古郡民が初めて世の中に「言論の砦、新聞が天下国家をも左右するものであることに強烈な印象を受けた」と、民衆の新聞への期待を指摘している。そこから三章(十二項)では、一八九三(明治二十六年)九月、県内初の新聞が那覇で誕生、「物議多き島」宮古からも体制批判の投書等が掲載されるようになった、四章(十二項)で、宮古も「理論的指導層の時代」へ入り、一九一四(大正三)〜一五年ごろ、慶世村恒任が初めてガリ版刷りの新聞を創刊したこと、立津春方や盛島明長、石原雅太郎らの動向を伝え、宮古の新聞の揺籃期と位置づけている。

五章では、一九二〇(大正九)年五月、宮古初の衆議院議員選挙を機に、初めて活版刷りの新聞『宮古新報』と『宮古時報』が前後して登場した、「新聞と政治がどちらからともなく寄り添う形でスタート」した、「宮古の天地に横行する怪物」(『宮古史伝』)の正体を政治抗争に求め、「在野精神を失った記者は記事を書く資格はない」との先

輩の言を紹介しつつ、第二次世界大戦では言論統制にもとづく四社統合による『宮古朝日新聞』の創刊にふれている。

六章からは戦後である。一九四五(昭和二十年)二月、資材不足・人手不足で停刊した『宮古朝日新聞』の復刊、『みやこ新報』創刊にふれつつ生涯を新聞人として生きる瀬名波進・栄父子、山内朝保、平良好児らの生き方を追っている。戦後数年、宮古は政治的動向に呼応するかのように十余種の新聞が創刊している。そうしたなかで一九五五(昭和三十)年九月、戦前戦後を通じて宮古初の日刊紙『宮古毎日新聞』が社長・真栄城徳松、編集局長・平良好児らの陣容で誕生した。『宮古時事新報』『宮古朝日新聞』『南海タイムス』三紙がそれぞれ隔日刊で発行されていたころである。八〜十二章では、『宮古毎日新聞』を中心に、その後の宮古の歩みを伝えている。創刊当初の紙面二頁建て二〇〇〇部発行から、四頁、八頁、十二頁へ、印刷も活版印刷からオフセットへと発展、今や発行部数も一万五〇〇〇部を数え、日本新聞協会に加盟するまでに発展している。その間、社長は真栄城から池村恵信、山内朝保、山内啓邦(現会長)、真栄城宏と五代にわたっている。最後は「創刊五十年を迎える宮古毎日新聞は、本業の面でも奉仕や文化活動の面でも、地域社会とのつながりを深めながら、二十一世紀を生き抜くことだろう」(「あとがき」)と結んでいる。

なお同紙創刊後に生まれた『日刊南沖繩』『日刊宮古』等はずもとより、一九六八年八月、『宮古時事新報』を引きついで創刊された現『宮古新報』についても詳細にふれている。文字どおり『宮古の新聞百年史』であるばかりでなく、宮古の近・現代史の入門書をもなしている。

(「宮古郷土史研究会会報」一五九号、二〇〇七・三・八)

18・安里進・高良倉吉・田名真之・豊見山和行・西里喜行・真栄平



## 房昭「沖縄県の歴史」

本書は一九七二年五月、沖縄の「本土復帰」に合わせて山川出版社が刊行した県史シリーズ47「沖縄県の歴史」の全面改訂版である。以来三十二年、史料の掘り起こしは県内外はもとより、広く海外にまで及び、研究の蓄積は目をみはるばかりである。分野別にはすでに多くの史料が翻刻・刊行され、著書・論考も少なくない。こうした各分野の第一線の研究者が、その専門の領域から分担・執筆し、通史として親しみやすい形で刊行するのはそう多くはない。

本編は、原始・古代から、近・現代まで十章構成である。「琉球文化の基層」「大型グスクの時代」(安里進)、「古琉球王国の王統」「海外交易と琉球」(田名真之)、「東アジアの変動と琉球」「琉球における身分制社会の成立」「王国末期の社会と異国船の来航」(豊見山和行・真栄平房昭)、「琉球国から沖縄県へ―世替わりの諸相」「近代化・ヤマト化の諸相」「繰り返される世替わり―『日本復帰』の前と後」(西里喜行)で、それぞれの時代を象徴する重要事項をとおして具体的に論述している。

一読して、琉球・沖縄史を日本史のなかの一県史―地方史として扱うのは当を得ないことを痛感させられる。それほど六人の研究者が描きだした琉球・沖縄の歴史展開は、日本史の周縁どころか、東アジアのなかで一国並みに如何に重要な地位を占めているかを明示している。巻頭の「風土と人間」(高良倉吉)が、国内どの地域にもない「独自の歴史」を展開してきた人びとの「強い自己意識をもつ島々」というのも、それゆえであろう。

この地域の先史時代は、縄文・弥生文化の影響を受けた奄美・沖縄諸島と南アジア系文化の宮古・八重山の二つの文化圏を形成していたが、十一世紀ごろに始まるグスク時代に両者の交流が始まり、「中世

日本の文化的影響とともに人の形質も日本化していった」(一章)という。それでもその立地条件によるのであろう、従来の日本史ではくれない独自の、地域性ゆたかな歴史を展開してきたのである。読者は、琉球・沖縄史研究の最新の成果を通史として学ぶことができるであろう。(「琉球新報」二〇〇四・一〇・三二)

## 19. 「宮古島市史」通史編『みやこの歴史』

## 1 宮古研究の最高水準

宮古島市教育委員会はこのほど、宮古島市史 通史編『みやこの歴史』を刊行した。明治以来の平良・城辺・下地・伊良部・上野の5市町村合併による宮古島市誕生(2005・10・1)にともなう初の修史事業である。翌年6月から、17人の編集委員が5年余分担・執筆し、論議を重ねての成果である。

現段階における宮古研究の最高水準を示すものといえよう。

## 2 地域性豊かな：

巻頭のグラビアは、「写真で見ると「ばんたがみやく」で、40頁、百数十枚の大方カラー写真である。初めに宮古の全体像をみせるためである。冒頭に1646年「正保の国絵図(宮古)」と、2012年現在の「空から見た宮古」が示されている。三百数十年の時代と空間をへだてた宮古が比較、対照できる。過去から、現在と未来を考える、この編集姿勢は全巻を通して一貫しており、心にくいばかりである。本論は、「序説 宮古の風土と人」で、「宮古史の時期区分」をこころみるとともに、自然や民俗を踏まえた総論的内容を示し、このあと五編構成で、宮古圏域の歴史的展開を具体的に跡づけている。

## 3 「琉球文化圏」形成

第一編「先史・グスク時代―南琉球先史時代―グスク文化へ」は、

縄文・弥生文化の影響を受けていない地域性豊かな宮古・八重山にふれ、第二編「古琉球〜統一へ動く宮古」(12世紀以降)で、海流と季節風で各地から渡来したであろう人びとによって始まった集落が次第にふえ、宮古としてまとまっていく過程で、沖縄島の王権と結び、「琉球文化圏」形成の一翼を担っていく。

第三編「近世〜薩摩藩・琉球王府統治下の宮古(1609年〜)は、これまでの琉球王府の間接統治から、幕藩体制のもと、琉球王府の直接統治へと変わり、薩摩藩・琉球王府両者への貢租(人頭税)確保を至上課題とする諸制度に整備される。

第四編「近代〜琉球処分から終戦までの宮古(1879〜)で、琉球は明治政府の強権によって近代統一国家日本に組み込まれた。「琉球処分」(廃藩置県)であり、沖縄県の誕生である。日本は欧米諸国に追いつくために、殖産興業と富国強兵を二大基本政策に帝国主義国家として成長していき、日清・日露の戦争をへて、「アジア・太平洋戦争」へと戦火は拡大し、敗北して近代の幕を閉じる。最期の激戦「沖縄戦」は「鉄の暴風」と呼ばれ、多くの命と形あるものの大方を失った。

さらに第五編「現代から戦後の宮古(1945〜)は、米英軍の連日の爆撃で焦土化したなかで、国・県との関係はなく、「自立」を模索しはじめるが、戦後初期には「文化立島」「楽土建設」などが標榜されている。米軍政下の宮古、「琉球政府」時代、復帰後の県政時代、市町村政の変遷など、政治、経済、産業、教育、文化、祖国復帰運動に代表されるさまざまな民衆運動や5市町村合併に至る経緯等が詳細にまとめられている。

#### 4 郷土学習の一環に

編さん委員会の事務局は生涯学習振興課で、委員会は四つの小委員

会で執筆者をまじえて議論を重ね、数回にわたって修正を求められた事例もある。「市史の読者」は市民であり、市民に分かりやすく、その上で研究者の批判にも耐え得るとの趣旨からである。その分、執筆者はもとより、事務局のご苦労は察して余りあるものがあつたらう。

合併前の6市町村における修史事業等の成果も踏まえ、最新の宮古研究の成果を盛り込んだ『宮古島市史』である。一人でも多くの市民が目を通していただきたい。とりわけ小、中、高校の先生方が郷土学習の一環として活用されるよう願うものである。

(「宮古毎日新聞」二〇二二・一一・八)